栄養学科
坂本　寛先生推薦
『海の森づくり
―いつまでも魚が食べられる環境へ』

松田　惠明著　（緑書房）

NPO法人「海の森づくり推進協会」代表理事が、海の環境と水産業の役割について分かりやすく解説した書である。

著者は、かつて私の博士論文審査の主査であった教授でもあり、今に至る付き合いをさせていただいている。

漁業者が、山に植林運動を行うことで海の環境が改善される話は各地で聞かれる。腐葉土が分解し生成するフルボ酸が土壌中の鉄と結びつきフルボ酸鉄となり海中へ流れ出て植物プランクトンを育てているのである。窒素やリンを含む栄養塩が増えることで、魚介類の増殖につながることは認められている。

しかし、一方で、窒素やリンを含んだ生活排水、農業排水が多量に流れ込む停滞水域においては、大量発生したプランクトンの死骸を、バクテリアが分解する過程において酸素を消費し海中の溶存酸素量の低下につながる。これが、青潮と呼ばれ魚介類の大量死をもたらす。

山の森は海の森を育てている。海の森とは、コンブやワカメに代表される海藻類の群生である。海藻は、海に過剰に流入した窒素やリンを取り込み、光合成のために水中に溶け込んだ炭酸ガスを吸収するのである。海の森は、環境のバランサーとしての役割にとどまらない。著者は海藻類の群生がもつ資源生産や環境保全機能にも着目している。藻場とも呼ばれる海藻の群生地には、魚介類の産卵基質や稚仔魚の生育場としての役割があることを指摘している。さらに漁業者が、海藻類を収穫することで陸上から流れ出た栄養塩を再び陸上に回収するという。つまり海藻類の収穫と藻場で増殖した資源の漁獲が、水産業の活性化へつながると力説するのである。以来今日に至るまでNPO法人の代表理事として、海藻養殖による資源回復を訴えている。その後姿から多くのことを学んできた私の心に期する言葉がある。

「良きリーダーになるために、良きフォロワーでありたい。良き研究者になるために、良き学習者でありたい。」